

子どもの本における働く母親像：『てっちゃんって へんな子、だけど…』に見る現状と展望

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5617>

出版情報：言語文化論究. 21, pp.41-47, 2006-03-16. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

子どもの本における働く母親像

— 『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』に見る現状と展望 —

谷口 秀子

1. はじめに

現在では、女性の社会進出が進み、母親になっても働き続ける女性も少なくない。また、一時期、独身のキャリア・ウーマンの格好良さを強調したドラマが盛んに放映されたが、現在では、それに加えて、母親であるキャリア・ウーマンが登場することもそれほど珍しくなくなっている。

大人向けの小説やドラマ、あるいはヤングアダルト向けの読み物や少女漫画における働く母親像は、大きく分けて二つに分類される。母親が身を粉にして働き、苦勞している様子が強調される場合、そして、子どもがいても、社会で活躍する颯爽とした様子が強調される場合である。最近の傾向としては、後者の方が増えており、社会で活躍しているキャリア・ウーマンの母親が、家庭ではだめな母親や妻であるというパターンも見慣れたものになりつつある。

それに対して、幼い子ども向けの本においては、読者層の子どもたちの母親に対する密着度や依存度が高いこともあり、母親は子どもを見守る庇護者として描かれることが多く、働く母親が登場することはそれほど多くはない。また、同様の理由で、働く母親の描き方も、上に述べた大人向けやヤングアダルト向けの作品におけるのとは異なっていることが多いと言える。

小論では、等身大の働く母親が描かれている子どもの本の一例である、『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』における働く母親像について論じ、働く母親とその子どもの直面する現状について考察する。

2. 構成とテーマ

『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』(1991年)は、上田めぐみという小学4年生の女の子(「あたし」)を語り手にした一人称の語りの物語であり、語り手のめぐみと隣に引っ越して来た年下の男の子てっちゃん(町田鉄夫)との関わりが中心となって物語が進行する。

めぐみの家庭は、父母とめぐみの三人家族であり、母親は仕事を持たない専業主婦である。一方、てっちゃんの家庭は、てっちゃんと母親の二人暮らしであり、母親は仕事に忙しい。専業主婦の母を持つめぐみにとって、仕事に忙しい母親を持つてっちゃんの生活は、自分の生活とはかなり異なるものであり、そのため、めぐみは、てっちゃんに対する戸惑いを感じる。専業主婦の母親を持つめぐみの視点は、常に家にいて、こまめに世話をしてくれる母親のいるめぐみにとっては普通のことだが、母親が仕事であまり家にいないため、母親にこまめに世話を焼いてもらえないてっちゃんにとっては、そうではないことなど、働く母親とその子どもをとりまく状況や問題点を映し出す鏡となっている。

常に家にいて面倒をみてくれる母親のいるめぐみの視点が描き出すてっちゃん母子の様子は、専業主婦の母を持つ子どもの状況と働く母を持つ子どもの状況との違いを対照的に映し出している。『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』は、語り手めぐみの精神的成長の物語であると同時に、働く母親とその子ども、あるいは、シングルマザーとその子どものあり方が、大きなテーマのひとつとなっていて、この両者は、緊密に絡み合っている。『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』は、専業主婦を母に持つ語り手のめぐみが、働く母親を持つてっちゃんとその母親に接するうちに、最初は自分とてっちゃんとの違いに違和感を覚えるものの、徐々にてっちゃんとしてっちゃんの母親に対する理解を深めていき、立場の違くてっちゃんを思いやることが出来るようになり、精神的に成長していく物語なのである。

3. 専業主婦の母親と働く母親

『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』には、めぐみの母とてっちゃんの母という二人の母親が登場する。めぐみの母は、専業主婦として家にいて、娘と夫の世話をしている。一方、てっちゃんの母は、仕事を持ち、ひとりでてっちゃんを育てている。このような専業主婦の母親と働く母親という二人の母親の立場の違いが、専業主婦の母を持つめぐみが、働く母親を持つてっちゃんやてっちゃんの家庭に対して抱く違和感によって、浮き彫りにされている。

めぐみの母は、ある意味で、伝統的な母親像に近い。外で働くことをせず、家にいて、こまめに夫や子どもの世話をしている。また、めぐみの母は、いつも家にいるため、母子の会話の機会も多く、そのことは、めぐみの語りの随所にかがえる。一方、てっちゃんの母は仕事から帰るのが遅いため、てっちゃんはひとりで留守番をすることが多く、母と子が一緒にいる時間は長いとは言えない。

めぐみの母が、主婦として、常日頃めぐみや夫に対して細かい心配りをしている様子は、てっちゃんが学校に遅刻しそうになっているのを見て、めぐみが、自分は遅刻したことが一度もないと語る以下の場面によく表れている。

あたしは、ねぼすけではないので、ちこくしたことなく一度もありません。たいてい、母さんがおこしてくれなくても、おきられます。フライパンの中で、目玉やきがジャーツとやける音で目がさめます。朝はいつも、トーストとハムエッグと牛乳とくだものをたべていきます。あたしが食べていると、お父さんが新聞をもってでていくので、「いってらっしゃい。」をいいます。

母さんは、

「定期いれは？おさいふは？ハンカチは？きをつけてね。」

といいます。毎朝おなじことをいうから、あたしもおぼえてしまいました。¹⁾

めぐみにとっては、至極当たり前の朝の風景が、働く母親との二人暮らしであるてっちゃんにとっては、そうではない。てっちゃんは、毎朝、袋から出したままの食パンやロールパンをかじりながら家を出て行くのである。また、めぐみの母が、よく手作りのお菓子を作ってくれるのに対して、てっちゃんの母には、そのような時間的な余裕はなく、てんぷらのような多少手間のかかる料理を作ることはほとんどない。さらに、てっちゃんの母が、仕事で忙しくて、給食費を銀行に払うのを忘れたため、それを知ったてっちゃんが、母親がお金に困っているのだと勘違いし

て、給食費を節約するために給食を食べなくなるという事件も起こる。てっちゃんの家の家事が行き届いていない様子や、仕事で忙しいてっちゃんの母親が専業主婦のめぐみの母親のように時間や手間をかけて身なりを整えることが出来ない様子は、語り手のめぐみによって、自分の母親との比較という形で、以下のように指摘される。

おばさんはいつも髪がぼさぼさで、うちの母さんみたいに美容院にいけないようです。

てっちゃんのうちは、あんまりきれいじゃありません。げんかんにお花とかおいてないし、ドアをあけると、少しだけへんなにおいがします。(p. 31)

このように、『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』においては、専業主婦の母親が行き届いた家事や育児をこなしているのに対して、仕事を持っている母親が、仕事で忙しく時間が取れないため、家事や子どもの世話が十分に出来ていない様子が、子どもの視点を通して、克明に伝えられるのである。

4. 働く母親と子どもの不利益

『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』においては、めぐみという専業主婦の母を持つ子どもの視点から、母親が社会に出て働くことによって生じる子どもにとっての不利益の数々が、指摘される。その中で、子どもにとって最大の不利益として考えられているのは、母親がいつもそばにいないということである。

てっちゃんが帰ったあと、あたしのへやはめちゃくちゃでした。かたづけながら、
「てっちゃん、またくるかな。やだなあ。」
といたら、母さんがこわい顔をして、
「てっちゃんはおうちに帰っても、お帰りってまってる人がいないのよ。まだ小さいのに、
かわいそうでしょ。」
といました。
「てっちゃんのおばさんは、おうちにいないの。」
「おばさんは、会社でいっしょうけんめいにはたらくてるの。てっちゃんのおうちはお父さんがいないでしょ。だから、いつもお母さんがおうちでも、そとでも、がんばらないといけないのよ。たいへんでしょ。」 (pp. 28-29; 下線は筆者)

上は、めぐみの母が、てっちゃんの母親が外に働きに出ているため、てっちゃんが学校から帰っても、母親が家にいないということを、めぐみに伝えている場面である。ここで、めぐみの母は、ひとりで留守番しているてっちゃんを「かわいそう」、働いているてっちゃんの母を「たいへん」というネガティブな言葉で、描写する。ここには、子どもを持った女性が働くことは「たいへん」なことであり、母親が働いているために、かまってもらえない子どもは、「かわいそう」というめぐみの母の考え方が根底にあり、これが、おそらく、母となった女性が専業主婦であることを選択する大きな理由のひとつであると言える。

このようなめぐみの母親の価値観を補強するように、母親が一時期パートの仕事をしていた時

のめぐみの過去の思い出が語られる。母親の留守中、ひとりで留守番をしていためぐみが感じた孤独や恐怖の回想が、当時のめぐみと現在のてっちゃんの置かれた状況をだぶらせ、働く母親を持った子どもに対する「かわいそうでしょ」という言葉を増幅させる。

うちの母さんも、ずっと前にちょっとだけ、パートのお仕事をしてたことがあります。学校から帰って、カチリとカギをあけると、うす暗いへやは、しいんとだまりこくって、だれもないにおいがしました。テーブルの上のよごれたカップ、ひらきっぱなしの新聞、げんかんにぼつんところがあった母さんのスリッパ……。

日がくるとこわいから、ずっとテレビをつけっぱなしでした。遠くのお寺の鐘がきこえてくると、なぜだか泣きたくなりました。

そんな時、母さんのカギが、げんかんでカチリとまわると、もうたのもしくって、スーパーマンがとびこんできたみたいで、あたしはいつもとびだしていきました。

(pp. 29-30; 下線は筆者)

ここには、ひとりで母を待つ子どもの不安な気持ちに加えて、母親が仕事に出ることによって家事が滞っている様子が、「よごれたカップ」「ひらきっぱなしの新聞」に象徴的に描き出されている。

さらに、母親が仕事をやめた時にめぐみが感じた安堵感は、母親が仕事で不在の時にひとり置かれた子どもが感じる不安や恐怖を逆に強調することにもなっている。そして、母親が一時的に働きに出た時のめぐみの回想は、子どもに寂しい思いをさせないために、将来自分は毎日家にいて子どもと一緒にいることの出来る専業主婦になるという決意で締めくくられる。

しばらくして、母さんが、
「しんどいから、もうやめた。おうちの仕事のほうがいいや。」
ってパートをやめた時、父さんは、
「うちの母さんは根性なし。」
とわらったけど、あたしはうれしくてわらいました。

あんな思いは、あたしはもういやです。もし、あたしがいつかお母さんになったら、毎日かならず家にいて、お帰り、といってあげたいのです。おやつをたべて、いっしょに学校のおしゃべりをして、おいしいごはんをたくさんつくって……いつもにこにこおうちでまっています。(pp. 30-31; 下線は筆者)

『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』においては、上で述べた、母親の留守中ひとりで過ごさなければならぬ子どもが感じる寂しさに加えて、母親が外で働く場合に生じる以下のようなデメリットが、描き出されているが、これらはすべて、働く母親が痛感することばかりである。

- ・子どもにひとりで留守番をさせなければならない。
- ・手の込んだ朝食を作る時間がない。
- ・出勤前は、登校前の忘れ物チェックなどの子どもの世話が行き届かない。

- ・前日仕事で遅く帰ったため、疲れて寝過ごし、遠足の弁当を作りそこなう。
- ・仕事で遅くなったりして、子どもの話をじっくり聞いてやれないことがある。
- ・仕事があるため、子どもが忘れ物をしても学校に届けられない。
- ・忙しいため、うっかりして、学校の給食費を銀行に払い忘れる。
- ・子どもの休日に仕事が入ったり、子どもの休日と自分の休日が合わなかったりして、なかなか子どもと一緒にテーマパークなどに出かけられない。
- ・仕事のある日は、手の込んだ料理が作れない。
- ・手作りのおやつを作る暇がない。
- ・家の掃除や整理整頓が行き届かない。
- ・仕事に加えて、家事や育児もこなさなければならないので、体力的に厳しい。
- ・多忙なため、時間のかかる美容院には頻繁に行けず、専業主婦の母親のように髪型がきちんとしていない。

『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』は、めぐみという、子どもの視点から描かれているため、当然、視点の限界がある。めぐみが働く母親について語る際は、子どもとの関係や家庭に関することが中心になっており、その結果、母親が働くことによる子どもや家庭に対する不利益が丹念に描き出されるものの、働く母親が職場でどのようなことをしているか、仕事に対してどのような姿勢で臨んでいるか、社会とどのような繋がりを持っているかなどについては、全くと言っていいほど語られない。また、働く母親が専業主婦の母親と比べて、十分にこなしかれていない事柄が指摘されるものの、働く母親が専業主婦の母親と比べて、得意とする事柄に関しては、ほとんど言及されない。そのため、めぐみの語りにおいては、母親が働くことが子どもに与える負担ばかりが強調される結果となっていることは否めない。

5. 働く母親への別の評価

確かに、めぐみの語りは、母親が働くことが子どもに与える負担ばかりを強調しているような印象を読者に与えるが、作者は、上で述べたような、働く母親を持った子どものこうむる不利益を指摘しながらも、めぐみの精神的成長の証としての視点の広がり過程を利用して、働く母親とその子どもに対する別の見方も提示している。

たとえば、めぐみの母親が、母親が仕事で留守がちのてっちゃんが「かわいそう」であり、働いて家計を支えているてっちゃんの母親は「たいへん」であるためめぐみに告げた場面が続いて、めぐみが自分の母親が一時働きに出た時の孤独感を回想した後の、以下のめぐみの語りは、母親の見方とは異なる視点を提供する働きをしている。めぐみは、ここで、

あたしは、うちに父さんがいて、ほんとうによかったと思います。てっちゃんにもいたらよかったのに、と思います。でも、てっちゃんはちっともさびしそうじゃありません。てっちゃんのおばさんも、いつもにこにこして、はりきっています。(p. 32; 下線は筆者)

と語っているが、てっちゃん母子は自分たちの状況を「かわいそう」、「たいへん」というように否定的に捉えるのではなく、前向きに生活していることがわかる。めぐみは、父親がいないてっちゃんの母親が働かなくてはならない状況を気の毒に思う一方で、その当事者であるてっちゃん

母子が不幸せそうではないことに言及する。てっちゃんは、少しも寂しそうではなく、てっちゃんの母親も、いつもにこにこして張り切っているのである。このようなてっちゃんの母親の明るくはつらつとした様子は、冒頭、引越しの挨拶に訪れた母親をめぐみが「にこにこ顔のおばさん」(p. 9)と描写しているところにもすでに現れている。このように、働く母親を持った子どもを「かわいそう」と思う専業主婦の母親を持つめぐみとその母親の固定観念は、てっちゃん母子のポジティブな様子によって、修正を加えられることになるのである。

めぐみが語るいろいろなエピソードから、てっちゃんが、口には出さないものの、確かに多少の寂しさを感じていることは容易に推測できるものの、てっちゃんは、自分自身を「かわいそう」とは思っておらず、子どもなりに母親が働く意味を理解しており、自分なりの協力の仕方をしていくことが随所に表れている。てっちゃんは、前日の仕事で疲れきった母親が遠足の弁当を作り忘れても、不平も言わずにコンビニのおにぎりを買って遠足に行き、母親が給食費を払い忘れた時も、母親の経済的負担を減らそうと、給食を食べることを拒否したりする。

働く母親とその子どもに対するめぐみの価値観の転換の大きな契機になるのが、てっちゃんの母親の入院である。てっちゃんの母親は、過労のため、肺炎を起こしかけて入院することになる。めぐみは、入院しているてっちゃんの母親から、てっちゃんのことを深く思う気持ちを聞き、てっちゃんが、給食のりんごを残して、入院中の母親に届けているのを目にする。このようなてっちゃん母子の密接な関係は、一緒にいる時間の長いめぐみ母子との関係に決して劣るものではない。

てっちゃんの母親の入院以来、てっちゃんに対するめぐみとめぐみの母の評価は一転する。「まだ小さいのに、かわいそうでしょ」(p. 28)と言われていたてっちゃんが、母の入院中、ひとりで掃除や洗濯などの家事をこなして学校に行き、放課後には母親の洗濯物を病院に届けている姿を見て、めぐみの母は、てっちゃんに対する評価を変え、「めぐみも、てっちゃんをみならって、お手伝いしなさい」(p. 139)と言うほどになる。このような母親の助けになりたいというてっちゃんの気持ちとてっちゃんの自立した様子は、仕事と家事に忙しい働く母親を持ったことによって育まれたものであるのは想像に難くない。ここで、母親が働くことは、子どもにとって、不利益ばかりではないことの一例が示唆されているのである。

6. おわりに：働く母親の抱える問題点と働く母親への支援

『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』には、働く母親が子育てにおいて直面する問題点がかなり正確に描かれている。この問題は、子どもに対して必要以上の負担を強いることにもなりかねず、改善が望まれるところである。もちろん、放課後に小学校低学年の児童を預かる学童保育などの公的な支援も広がっており、徐々に改善の方向に向かっているのは事実である。しかしながら、学童保育の時間の問題や労働環境など、改善すべきところは依然として多く、支援はまだ十分とは言えない。そのため、働く母親は、常に仕事と子育てのバランスの葛藤の中で生活していると言っても過言ではない。

1991年に出版された『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』には、学童保育も地域サポートシステムも登場しない。ここで、大きな支援となっているのは、めぐみの母がてっちゃんやてっちゃんの母親に差し伸べる援助の手である。めぐみの母の思いやりのある援助は、母親が帰るまでひとりであるてっちゃんの寂しい気持ちと働いているてっちゃんの母親の苦労に対する理解と共感に端を発している。めぐみの母は、てっちゃんがひとりで留守番しているのを気の毒に

思い、てっちゃんを自宅に招き入れる。てっちゃんの母親がめぐみの母の好意をありがたく受け入れている様子は、てっちゃんが、母親が置いていってくれる二人分のお菓子を持って、めぐみのうちに遊びに来るようになったことによく表れている。また、めぐみの母は、めぐみにも、てっちゃんのことを気にかけるように言い、時には、てっちゃんに料理やお菓子の差し入れをしたりもする。さらに、母子二人暮らしのてっちゃんの母親が入院した時には、(結果的にはてっちゃんはひとりで生活することを選んだものの、) てっちゃんを預かることを申し出たり、てっちゃんの食事の世話をしたり、入院中の母親を頻繁に見舞って元気づけたりする。

このように、てっちゃんの母に対するめぐみの母の援助は、働く母親と専業主婦の母親の間の連帯の可能性を示している。子どもがいても働くことと子どものそばに居るために家にいることのどちらを選ぶかは、個人の選択の問題であり、そのどちらの方が良い選択であるかは、一概には言い難い。しかしながら、働く母親には、子育ての面で、乗り越えなければならない問題が少なくなく、最大の懸念は、この物語におけるのと同様、母親不在時の子どものことである。この意味で、めぐみの母のような、働く母親と子どもを支援してくれる存在は、大変ありがたいものである。しかしながら、働く母親は、仕事を通じた社会との繋がりはあっても、地域から孤立している場合も少なくないため、働く母親がめぐみの母のような援助者に出会えない場合もかなり多い。そのため、このような女性の連携による子育て支援および専業主婦の社会参加の場の提供という観点からも、現在、公的な施設のほかに、主婦が自宅で託児を引き受ける地域的な子育てサポート体制が広がりつつあるのは、働く母親にとってもその子どもにとっても、実に好ましいことであり、今後の充実が望まれところである。

注

- 1 高山栄子(文)、武田美穂(絵)『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』(ポプラ社、1991)、pp. 20-21. 小論における『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』からの引用は、すべて、この版により、本文中に頁数のみを記す。

参考文献

- 岩男寿美子、杉山明子. 『働く母親の時代—子どもへの影響を考える』. 日本放送協会, 1984.
総務庁行政監察局(編). 『子どもを持つ母親が安心して働くことができるために—児童福祉対策等に関する行政観察結果から』. 大蔵省印刷局, 1998.
- 高山栄子(文)、武田美穂(絵). 『てっちゃんってへんな子、だけど・・・』. ポプラ社, 1991.
- 保育園を考える親の会(編). 『はじめての小学校&学童保育』. 学陽書房, 2000.
- マザー・ネットワーク(編). 『ワーキング・マザーの子育て心得帳』. PHP研究所, 2000.